

建設時評

転換点

東北大学大学院 情報科学研究科

准教授 平野勝也

政権が代わった。「コンクリートから人へ」と言う、民主党が打ち上げたアドバルーンが、国民の審判という大義名分を得た。新聞報道などを見ていると、公共事業費は、大幅削減となることは確定的のようである。そのこと自体に、大きな異論を挟む気はない。しかし、自民党政権も取り組んできた（尤も、景気対策のための補正予算でなし崩しになったという批判もあろうが）公共事業費の削減をより多くやって、単に「無駄遣いを減らしました」と言う政策にしか、今のところ見えないことに、若干の危機感を覚えている。

* * *

我々の先輩諸氏は、日本のために、本当に心血を注ぎ続けてきた。戦災に焼き尽くされた都市を復興するための区画整理をこなすと、ワトキンス調査団に「日本に道路はない」とまで言われた日本の道路整備状況に対し、道路特定財源制度を導入し、国土開発幹線自動車国道網の整備に邁進し、高度経済成長を後押しした。新幹線の整備も進み、都市間高速交通網整備は一気に進んだ。高度経済成長により、急速に進む都市化と都市域の拡大によ

り、顕在化してきた都市河川型の洪水対策に邁進し、利水、発電、治水のダムが多く造られ、産業成長を支え、都市の水害防御にも貢献してきた。

こうした、様々な整備を一言に集約するのは簡単ではないが、乱暴に纏めてしまえば、これらは、「焼け野原から都市を復興し、都市間交通網整備と都市水害防御による、高度経済成長のための社会資本整備」であったのではないだろうか。そして、それを邁進するための、この国全体の仕組みが、確かに存在していた。

組織や仕組みというものには、どうしてもその体制を維持する慣性力が働く。オイルショックで、「高度経済成長のための」社会資本整備に暗雲が立ちこめても、高速交通網の整備が進むにつれ、治水水準が上がるにつれ、「無駄な公共事業」という言葉が、多く聞かれるようになっても、先ほど乱暴に纏めた、社会資本整備の旗印と、それを支えるこの国全体の仕組みは、バブルがはじけても、生き続けたように思う。

しかし、そうした経済社会状態の変化との相克により、その旗印と、この国全体の仕組みは、少しずつ破綻を来たしてきた。いつしか、55年体制は崩壊し、道路特定財源は消え、そして、ついに今回、自民党が第一党ではなくなった。こうした動きに、「戦後から、高度経済成長を支えてきた、この国全体の仕組みが、完全なる終焉を迎えた」という解釈を与えるのは、一方的な見方に過ぎるであろうか。

* * *

今が、こうした時代の大きな転換点であるという認識に立つと、実は、公共事業費の大幅削減というのは、大きな問題では無いような気さえしてくるのだ。なぜなら、もっと大きな問題が、そこにあると思うからである。

公共事業とは、社会資本整備である。社会資本整備は、将来の日本の、国土、地域、都市に必要な骨格を創り、そしてそれを維持するものだ。より大きな天下国家の大計から、公共事業費を減らすことも、必要なかも知れないが、喩えそうであっても、その中で、社会資本整備をどのように行うのか、基本的な戦略を見失ってはならないのではない。単に予算を減らすことだけでは、日本の国土、地域、都市に未来は見えてこない。終焉を迎えた、「高度経済成長のための社会資本整備」という旗印が変わる、新しい旗印が掲げられなければ、日本の将来は、暗いものになりかねない。重要なのは目先の予算額ではない。どういった戦略で社会資本を整備するのか、与野党関係なく、公然と、そして、熱く議論して頂きたいと、切に思う。

* * *

「都市の魅力を高めるための社会資本整備」。些か使い古された感のある言葉かもしれないが、浅はかな筆者なりに思う次の旗印が、これである。東北を回ると高速交通網が整備された、いわゆる中核市であっても、疲弊した姿を呈している。この先、喩え総人口が減ろうとも、中核市までもが疲弊してしまうようでは、日本の国土に未来はないと真剣に思う。

産業振興においても、全ての産業で、より高度な知識や創造性を発揮しなければ、未だ賃金の安い、アジア諸国の台頭に太刀打ちできない。そのためには、人間の創造性を高める都市という装置がどうしても重要になるだろう。

こうした、都市の魅力は様々であり、地方分権とともに、それぞれの都市が、それぞれの戦略を定め、社会資本整備やその他様々な手法で、魅力を高めていくことになると思われるが、社会資本整備について、少なくとも

全国で共通しているのが、これも既に使い古され、陳腐化している感のある言葉であるが、「量から質への社会資本整備の転換」であろう。どんな「質」を求めるかは、その都市・地域が決めていけばいい。しかし、より賑わいや活力を増すような魅力ある中心市街地の街路整備や市街地再開発、美しい風景をより美しく見せ、観光価値を高めるような道路改良など、都市や地域、ひいては、日本の未来を見据えた時、それを支える「量」ではなく、「質」のための社会資本整備は枚挙にいとまがないのではないのか。

* * *

「コンクリートから人へ」。美しいキャッチフレーズである。しかし、それと同時に、残された「コンクリート」にも、新しいキャッチフレーズが必要なのだ。「都市間交通網から都市へ」そして、「量から質へ」とでも言っておこう。それらを通じて、「都市の魅力を高めるための社会資本整備」へと転換して行って、初めて、新しい時代が始まるのではないだろうか。

そう。公共事業費の「量」よりも、公共事業費の「質」すなわち中身の方が、重要な問題を秘めているのではないだろうか。後世の土木史家が、今の時代を社会資本整備が劇的に縮小した時代と言われるのではなく、社会資本整備の歴史的転換点だったと、言わせたものである。

そうすれば、以前小欄でお話した、「高度成長期の亡霊」を振り払った、作業ではなく、より質の高いものを、より安く造るという、真の意味でのエンジニアの時代がやってくるのだ。それは、エンジニアにとっては、やり甲斐のある、正しく明るい未来だとそう思う。